

多職種との協働に向けた医療保育士の役割と 専門性についての文献レビュー

小島賢子¹⁾ 藤井清美²⁾ 大方美香²⁾

¹⁾ 大阪青山大学 ²⁾ 前 姫路大学 ³⁾ 大阪総合保育大学

**Review of the Literature on Specialty and the Role of Medical Nursery Teachers
for Collaboration with the Other Multiple Professionals.**

Satoko KOJIMA¹⁾ Kiyomi FUJII²⁾ Mika OOGATA³⁾

¹⁾ Osaka Aoyama University ²⁾ Himeji University

³⁾ Osaka University of Comprehensive Children Education

要 旨

医療保育士について2004～2021年の文献検索を行い、小児医療における多職種との協働に向けた医療保育士の役割と専門性及び養成カリキュラムについて明らかにした。結果、1. 医療保育士は医療の基礎的知識を持ち、病気の子どもの発達を促し、成長への支援をするだけにとどまらず、療養生活環境を保育の環境として構成し、遊びを通して子どもがその子らしく療養生活を主体的に過ごすことができるよう支援することである。2. 医療や入院環境を含めた医療保育関連科目を保育士養成の科目として配置し、病児の保育に関する知識や技術を高めることが求められている。3. 看護師と保育士は、お互いに専門性を理解することが必要となること。相互理解をはかるためには、子どもを中心とした情報の共有、子どもへの支援計画への意見や助言を出し合う討議の場で、積極的にコミュニケーションを双方から持つ必要があること。4. 医療保育士と多職種との協働は、保育の活動内容について相談や情報を得て相互の連携を行うことによって協働はなりたつことが明らかになり、他の医療職との積極的な連携・コミュニケーションを意識していくことが重要であることが明らかになった。

Key words : Medical nursery Teachers, Specialty, Collaboration

キーワード：医療保育士，専門性，協働

I. 緒言

我が国の小児医療現場で初めて保育士が配置されたのは、1954年であったとされ、その活動は入院児に遊びを提供することが求められていた¹⁾。その後、小児医療の技術進歩に伴い、生存率が高まる中で、治療 (cure) のみならずケア (care) の必要性が認識され、子どものQOLの向上の重要性が求められてきた。このような社会背景の中、2002年に厚

生労働省は子どもの入院環境の改善のため、病棟内へのプレイルームの設置や保育士の導入を進めた。2007年には「日本医療保育学会認定・医療保育専門士」資格の認定制度が始まり、入院する子どもに対するQOLの向上のために専門的資格を持つ保育士の育成が始まった。

近年、病院に導入されている他の職種は、イギリス「ホスピタル・プレイ・スペシャリスト (以下HPS)」やアメリカにおける「チャイルドライフ・

スペシャリスト（以下CLS）」の養成課程を経たスペシャリストたちや子ども療養支援士（以下CCS）と多様である。そして、医療保育士の養成は、3年制の専門学校、短大および大学で行われており、医療保育専門コースや医療保育専攻科という課程がある。小児医療における保育士の専門性を認定する名称や認定機関については、日本医療保育学会の認定する「医療保育専門士」、入院ではない病児を施設で保育する、または、訪問して保育を行う保育士は、「病児保育士」とされ、一般社団法人全国病児保育協議会が認定している。また、2013年度から創設された「病児保育専門士」と、一般財団法人日本病児保育協会が認定する、2013年度から創設された「認定病児保育スペシャリスト」などがある。2010年に診療報酬の改定により、病棟保育士配置に伴う小児入院医療管理料が引き上げられたことで、保育士雇用数の増加傾向が認められている。しかし、増加傾向にはあるが、雇用形態が不安定であり、保育士が看護部に所属すること、医療の中で働く場合に、専門的な立場としての発言をする機会が少ないこと、他職種との連携上の問題などによって、保育の実践そのものへ影響している実態がある。そこで、より専門性を明確にした業務の確立や明確化が求められている²⁾。

入院患児にとって保育が持つ意味は大きい³⁾。子どもにとって病院とは非日常の世界であり、体験する多くは子どもの発達や心への負担となっている。そのような子どもに対して「適切で安全な遊び」「成長・発達に見合った保育」を提供することは、子どものQOLを高める意味を持った活動である。小児医療で医療保育士が、その専門性を認められ入院する子どもに保育を実践することができれば、子どもの病気に向かう対処能力を発揮できる環境となることが考えられる。

II. 問題と目的

1. 問題

小児医療における保育士の役割は、入院している子どもの非日常の生活の中で、子どものQOLの向上のために、保育士の専門性を発揮することである。それは、子どもの育つ権利を保障するという観点から子どもの入院生活を豊かにする活動を計画し実践する⁴⁾といわれている。そのため、継続的に保育を実践できるよう、小児医療の場における医療

保育士の専門性や役割を確立し、明確化が求められている。また、医療保育士は、保育士としての技能に加えてエビデンスを表現する力を持つこと、かつ、病気の子どもの疾患や薬の知識等の基礎的医学知識が求められている。しかし、保育士養成校では、子どもへの個別対応であるとされる医療保育に対応できるカリキュラムを導入している養成校が少ないと指摘されている⁵⁾。さらに、その専門性を発揮するために、小児医療チームである看護師及び、多職種の認識や理解を得ることが必要であると明らかになっている⁶⁾が、病児に関わる多様な名称の保育士、HPS、CLS、CCS等が小児医療チームで働いていることや、保育士としての意図や根拠を述べる場がないことなど⁷⁾から、理解されにくい現状が認められる。

そこで、医療保育士の役割や専門性について明らかにされていることは何であるか、また、小児医療の場において医療保育士に求められる保育を実践するうえで必要なカリキュラムの方向性について示す必要がある。そのうえで、多職種との協働における課題はどのようなものがあるかについて検討することが重要である。

2. 目的

本研究の目的は、文献検索を行い、小児医療における医療保育士の役割や専門性について明確にする。また、小児医療の場において医療保育士に求められる保育を実践するうえで必要なカリキュラムの方向性について示し、多職種との協働に向けた課題について検討する。

III. 方法

1. 研究方法

1) データの収集方法

文献検索は、国内発行の医学・看護学等及びその関連領域の雑誌論文を収録した医学文献データ「医学中央雑誌」と、国立情報学研究所学協会で発行された学術雑誌と大学等で発行された研究紀要の両方を検索できる「CiNii（国立情報研究所論文情報ナビゲーター）」の検索媒体を使用した。文献は総説・原著論文・研究報告・実践報告を対象とした。対象期間は2004年～2019年の19年間とした。医学中央雑誌にて前者が9件、後者が6件、CiNiiでは22件の文献が抽出。

2) 対象の文献の概要

対象となる件の概要を、表1「医療保育士に関連する研究一覧」に示した。論文は29件であり、内訳について原著論文が9件、総説が2件、学術論文が5件、研究報告が7件であった。医療保育士の現状については3件、医療保育士の役割と専門性の文献は9件、医療保育士のカリキュラムに関連する文献は7件、看護師と保育士の協働に関する文献は5件、多職種との協働に関連した文献は4件であった。研究方法は、質問紙を分析した文献は10件、文献レビューは4件、資料、活動記録、カリキュラム等の記録分析による文献は4件、半構造化面接法による文献は5件、質問紙および半構造化面接法による文献は2件、実践報告は2件、フォーカスインタビューによる文献は2件であった。(表1参照)

3) 用語の定義

- (1) 医療保育：医療を要する子どもとその家族を対象として、子どもを医療の主体として捉え、専門的な保育を通して、本人と家族のQOLの向上を目指すことを目的としている。

「医療保育セミナー：日本医療保育学会編、2016に準じて」

- (2) 医療保育士：医療保育を行う保育士「帆足、2009に準じて」

- (3) 医療保育専門士：日本医療保育学会が認定した資格であり、病気や障害のある子どもの権利を保障する仕事で、医療を要する場でもその子らしい生活を送ることができるように、その子らしい成長発達を遂げることができるように保育を通して子どもとその家族を支援する役割を持つ。「中村、2018に準じて」

IV. 結果

本研究の目的にあった文献の分類は、1. 小児医療における医療保育士の役割と専門性に関するもの、2. 医療保育士のカリキュラムに関するもの、3. 看護師と保育士の協働に関するもの、4. 多職種との協働に関連したものとなった。

1. 小児医療における医療保育士の役割と専門性に関するもの

子どもが入院する病棟の保育士に関する文献検討の結果では、保育士は、家庭と違う生活環境での

個々の発達段階に合わせた基本的な日常生活への援助と心身の発達へのサポートであると考えられ、看護師が考える役割は、遊びの相手、話し相手、家族への子どもの情報提供者として考えていることが明らかになっている⁸⁾。また、保育士の援助については、子どもの遊び、環境整備の割合が高く、学童期や思春期児童への学習支援がされず、プレパレーションやカンファレンスへの参加が実施されていない実態が明らかにされている⁹⁾。このことは、保育士の専門性が小児医療の場で多職種に伝えられていないと考えられる。

医療保育士の業務の中心は医療機関においても、保育士の専門性を発揮することである¹⁰⁾。そして、非日常的環境に身を置く子どもたちが安心・安全の基地、すなわち、心のよりどころとしての保育士との親密に関わることによって、保育士や他児との遊びを通して成長し続けることを支援する¹⁰⁾といわれている。実際に、入院している子どもたちが医療保育士とともに、遊びを通して主体的になるという心理的变化も認められている¹¹⁾。また、役割として、病院らしくない環境づくりや子どもの情緒の安定を図る活動を行い、家族支援を実践している¹²⁾。さらに、医療保育士の専門性について、保育の知識や技術に加えて疾病や医療に関する知識があること、他の医療職と意思疎通や議論ができること、可能な範囲で病状の変化に合わせて保育を考え実践すること¹³⁾と明らかにされている。

実践のためには、保育士の保育に関わる知識・技能・判断を現状より高い水準に引き上げる¹⁰⁾ことが重要であるといえる。役割と専門性を確立するためには、それらについて医療の場で顕在化する必要が求められている。そして、看護師との相互理解を図り、保育の視点を多の医療職種に理解されるよう表現できることが課題となると考える。

2. 医療保育士のカリキュラムに関するもの

入院する子どもにとって保育士は、療養生活を充実させる存在であるといわれている¹⁴⁾。医療保育士の実践は、子どもたちの健やかな成長発達を願っていること、遊びの保障と情緒の安定を核にしていること、基本的な生活習慣の援助や自立に関わること、家族への精神的援助に関わることなどである。しかし、保育士の養成校では、医療保育に対応できるカリキュラムを導入している養成校が少ないことが指摘されている¹⁵⁾。また、医療保育のカリキュラムに

表1 文献検討一覧表

番号	著者名	年	論文名	雑誌名	目的	対象	方法	分類
1	吉田幸恵	2010	保育士養成の研究—医療保育専門士の展開から—	名古屋経営短期大学子ども学研究論集 No.2, (2) 11-23	保育士養成の制度展開を研究し今後の課題を引き出す。特に小児医療現場を職域とする保育士の登場と医療保育専門士資格成立の動向に視点を置き保育士資格との関連性を分析する	保育士養成や医療保育専門士資格に関する論文	文献研究	保育士養成における医療保育士カリキュラムの必要性
2	金城やす子	2012	小児病棟における保育士の業務実態と期待されること—全国の小児病棟看護師長の調査から—	医療と保育 Vol.10 No.1, p.2-11	①小児医療施設における保育士配置の実態及び勤務状況と②保育士が配置されている病棟の看護師長は、保育士に何を期待するのかを明らかにする	小児科の診療科を持つ病院1044か所(2003-2004宣告病院リスト)の小児病棟を担当する看護師長対象回収は450人回収率43.1%病院種類 小児専門病院8、大学附属病院56、一般病院340、その他及び未記入46	郵送留め置き法による質問紙調査	医療保育士の役割と専門性・必要性
3	原田真澄	2008	入院患児にとって医療保育が持つ意味	中国学園紀要(7), 69-75, 2008-06	保育所・施設とは異なる医療現場での保育の意義をまとめる	保育士へのインタビュー・病院の視察、インターネットからの判断	文献レビュー	医療保育士の役割と専門性・必要性
4	山田千明・林 江恵子・高橋君江・石田治雄	2009	病棟保育における保育士職の専門性	共栄学園短期大学研究紀要第25号, p.137-150	病院に何故保育士が配置される必要があるのかを検証するため、保育士の専門性を整理する	行政文書等の分析2008年版保育所保育指針の検討、保育士・療養指導室長へのインタビュー調査	行政文書等の分析2008年版保育所保育指針の検討、保育士・療養指導室長へのインタビュー調査	医療保育士の役割と専門性・必要性
5	佐々木澄子・森 美智子	2017	看護との連携からみた保育士養成施設における医療技術教育	日本ヒューマンヘルスケア学会誌2(1) 81-91	看護との連携からみた保育士教育における医療技術教育の内容を明らかにし、保育に必要な医療知識やチーム医療における医療保育士について検討する	保育士教育を行っている大学・短期大学・専門学校での保育技術を担当している教員294名	郵送による質問紙調査	保育士養成における医療保育士カリキュラムの必要性
6	飯村直子・江本リナ・河口千鶴・中村仲江・日沼千尋・平林優子	2008	医療施設における看護師と保育士の連携の実態—健やか21推進事業 小児の入院環境向上のための活動【保育関連職種との連携プロジェクト】	日本小児看護学会誌Vol17 No.2, p.66-72	保育士の専門性の発揮や看護師との連携に関する課題の検討を目的とした18年度保育関連職種との連携プロジェクト活動の一つの目的として、医療施設における看護師と保育士の連携に関する看護師の意識を明らかにすること	日本小児看護学会第16回学術大会に参加者を対象にした	質問紙調査	看護師と保育士の連携・協働の現状と課題：看護師の認識 保育士の目標が見えにくい
7	深谷基裕・伊藤孝子・江本リナ・飯村直子・西田志摩・筒井真優美・松尾美智子・山内朋子	2008	子どもが入院する病棟の保育士と看護師との協働—保育士が専門性を発揮できないと感じる背景—	日本小児看護学会誌Vol17 No.2, p.24-31	子どもが入院する病棟の保育士と看護師との協働—保育士が専門性を発揮できないと感じる背景を明らかにする	関東地方の総合病院で子どもが入院する病棟に配属されている保育士7名	半構造的インタビュー的的分析	看護師の保育士へ認識の具体化
8	秋山真理恵・江本リナ・松尾美智子・飯村直子・西田志摩・筒井真優美	2008	子どもが入院する病棟の保育士に関する文献検討—保育士の役割と現状—	日本小児看護学会誌Vol17 No.1, p.79-85	病棟で活躍する保育士の役割や現状を把握し実態を明らかにする	1995年1月-2006年3月までの日本国内の文献から文献検索を行った2002年-2005年までの日本医療保育学会誌「医療と保育」の文献を追加した	文献レビュー	医療保育士の現状
9	鈴木美佐・流郷千幸・村井博子・平田美紀	2017	小児病棟における保育士の雇用に関する実態—公立総合病院の看護部長による回答から—	聖泉看護学研究Vol.6 pp.53-66	プレパレーションにおける看護師と保育士の協働を目指すための基本的資料として総合病院小児病棟における保育士の雇用実態について調査する	小児病棟を持つ公立総合病院133施設に勤務し、看護管理者として看護師・保育士雇用に権限を持つ看護部長133名	郵送による自記式質問紙調査	医療保育士の役割と専門性・必要性
10	松田信樹・濱田真由美・鎮 朋子・大西雅裕・柚山貴要江	2016	医療保育士の業務に関する調査—課題と将来展望—	兵庫大学論集第21号, 199-205	医療の現場で働く保育士を対象として医療保育士の仕事の実態と課題を明らかにする	19名の医療保育士	郵送による質問紙調査および個別面接調査(半構造化面接)	医療保育士の役割と専門性・必要性
11	能澤ひかる	2014	病棟保育士・子ども療養支援士から見た病棟の子どもたちの心理的变化	お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要Vol.16, p.25-34	病棟にいる子どもたちに生じた心理的プロセスを明らかにする	病棟保育士と子ども療養支援士の9名	半構造的インタビューによるインタビューによって分析する 内容は子どもとのかかわり、印象的な子供の変化、その変化についてご自身が感じていることを自由に語る	CCS・病棟保育士のかかわりによる子どもの変化
12	京極 恵・千田晶子	2010	小児病棟での保育士の役割と活動の実態について	近畿大学臨床心理センター紀要Vol.3: 177-189	入院している子どもにとって保育士は何のために必要なか、実際に当院はどのような活動をしているか報告する	病院における保育士の活動	病院における保育士の活動の実態の報告	看護師と保育士の連携・協働の現状と課題：保育士の業務内容の不定さ、医療的知識不足
13	上出香波・斎藤政子	2014	小児病棟における保育士の専門性に関する検討—医療保育専門士への面接調査を通して—	保育学研究第52巻, 第1号, 105-115	「医療」に対するイメージの変化を通して実習および学内指導の効果の検討	日本医療保育学会認定の医療保育専門士10名を対象にした。小児系病棟に勤務している、または、勤務していた経験を有するもの	半構造化面接法によるインタビューによる自信が認知している病棟内での専門性や役割りに関して面接調査を行い内容を分析(単語の集計をクラスター分析にて解析する方法)。	医療保育士の役割と専門性・必要性
14	鈴木裕子・北村亮俊・及川郁子・帆足英一	2004	医療保育士の専門性と養成上の課題	東京家政大学研究紀要第44集(1) pp.111-116	医療保育士としての専門性に向けて保育士が専門職として位置づけ役割が確立しているドイツの小児病院における保育士の実態を捉えることと日本の現状のアンケートを比較検討すること	ドイツの医療機関における保育士・医療看護職と日本医療保育学会の保育士196名、看護職(医療保育士が病棟勤務する)の病院78	面接調査・アンケート調査	医療保育士の現状
15	原田真澄	2007	医療保育専門士の資格制定に伴う養成校の課題	中国学園紀要(6), 97-103, 2007-06	医療保育の実績は何かを文献によって明らかにする	文献	文献レビュー	医療保育士のカリキュラムの必要性

番号	著者名	年	論文名	雑誌名	目的	対象	方法	分類
16	宮津澄江・笹川拓也・入江慶太・神垣彬子	2009	医療保育養成の取り組みに関する現状と課題	川崎医療短期大学紀要29号 p59～64	医療保育科開設5年間の病児保育コースにおける医療保育者養成への取り組みについての紹介と医療保育者の役割について考察すること、また、医療保育者養成について検討するとともに医療保育者の現状と課題について考察する	医療保育教育課程を検討する	医療保育士のカリキュラムの検討と考察から医療保育養成の現状と課題について明らかにする	医療保育士の教育課程の課題
17	新垣彬子・入江慶太・笹川拓也・宮津澄江	2009	本学医療保育科病児保育コース学生の学びに関する研究Ⅰ:「医療」に対するイメージの変化から見る実習および学内指導の効果の検討	川崎医療短期大学紀要29号 p71～77	「医療」に対するイメージの変化を通して実習および学内指導の効果の検討	研究1:本学医療保育科3年生内病児保育コース37名 研究2:医療保育の養成をしない一般の保育養成学生37名	アンケートによる調査研究 質的記述的研究	医療保育士の教育課程の課題
18	金城やす子・確氷ゆかり・安心院朗子・小川圭子	2011	保育士養成校に在籍する学生の医療保育に関する認識	障害理解研究(13) 35-43	保育士養成の基礎教育で医療保育に関連した内容が教育されているか、また、学生は医療保育に関する知識および将来の職業選択として医療保育をどのようにとらえているのか明らかにする	保育士養成課程を持つ大学生300名程度、短期大学生500名程度。東京・大阪・兵庫・静岡の4施設の学生	質問紙調査法	保育士養成における医療保育士カリキュラムの必要性
19	金城やす子・松平千佳	2005	小児看護における医療保育士の存在と今後の課題—イギリスのHPSの実情と教育過程から我が国の医療保育士の教育の在り方を検討する—	平成16年度特別研究報告書 第72巻,第4号。 P558-563	医療保育士の現状を調査し小児医療・看護における必要性や役割を明確にする	s県の医療保育士18名	調査研究(アンケート調査および半構造化面接によるインタビュー)	医療保育士の現状
20	中村伸江・宮本茂樹・松浦信夫・相吉 恵・榊端希子・高橋みゆき	2013	小児病棟で働く保育士の活動実態と病棟保育で役立っている保育士としての教育や経験	小児保健研究 第72巻,第4号。 P558-563	小児病棟で働く保育士の活動実態を把握するとともに病棟保育で役立っている保育士としての教育や経験を明らかにし、小児病棟における医者と保育士の協働や小児医療の場で働く保育士の教育について示唆を得る	全国の小児科学会専門医認定看護師・保育士・その他の非医療職の回答の中から保育士74人の回答を対象にしている	郵送による自記式質問紙調査	保育士養成における医療保育士カリキュラムの必要性
21	山北奈央子・浅野みどり	2012	看護師と医療保育士の子どもの尊重した協働における認識	日本小児看護学会誌, Vol.21, No. 1, 1-8.	医療保育士の役割や専門性、協働に関する看護師と医療保育士両者の認識と課題を明らかにすること	4施設の小児病棟に勤務する看護師17名と医療保育士15名	グループに対してインタビューガイドに沿ってFocus group Interviewを30分から2時間の実施し録音をした。録音データを逐語録に起こしコード化した類似性により集約をしてサブカテゴリーとカテゴリーを抽出した。	看護師と保育士の連携・協働の現状と課題:医療保育士の役割と専門性を伝える
22	穂高幸枝	2013	看護師がとらえた病棟保育士の専門性とそれをとらえるきっかけとなった体験	日本小児看護学会誌Vol22, No2,p89-96	看護師と病棟保育士の協働を目指し、看護師がとらえた保育士の専門性と専門性をとらえることに関係した体験を明らかにする	病棟保育士の業務が確立している病棟で2年以上勤務し、病棟保育士と働いた経験が1年以上ある看護師9名	半構造的面接法による質的帰納的研究 病棟保育士の専門性と看護師の体験に着目して一つずつの意味のまとまりでくぎって要約しそれをコード化した。	看護師と保育士の連携・協働の現状と課題 連携協働に向けた両者の良好な関係
23	土屋昭子・吾田富士子・確氷ゆかり・杉山全美・吉田弥生	2019	医療保育専門士の業務実態—活動フィールドによって異なる専門性の解析のために	医療と保育 Vol.17 No.1p6～p15	業務実態及び活動するフィールドによって異なる専門性を明らかにする	医療保育専門士資格を習得後1年経過した保育士57人	郵送による自記式質問紙調査	多職種協働に向けた保育士の専門性
24	小野鈴奈・谷川弘治・濱中喜代	2019	小児医療現場で多職種連携・協働していくために保育士に求められること	医療と保育 Vol.17 No.1p28～p40	看護師・保育士・教師の専門性や役割を踏まえた連携・協働について、現状を把握するとともに、保育士にはどのようなことが求められる、どう連携・協働に取り組むべきかを検討する	2010年より開催している「病気の子どもへのトータルケアセミナー」に参加経験があり、調査時点で小児医療の現場経験が3年以上の看護師、保育士、教師を対象にして選ぶ(看護師3名、保育士2名、教師6名)	フォーカスグループインタビュー	多職種協働に向けた保育士の専門性
25	上出香波・林 典子	2019	病棟保育士が考えるチーム医療の一員としての認識について	医療と保育 Vol.17 No.1p42～p51	チーム医療におけるチームの一員としての認識の有無について、その実態を明らかにするとともに、チームの一員としての認識の有無と関連する要因について検討する	小児病棟に勤務している病棟保育士230名	対象施設に勤務する病棟保育士への郵送法による匿名調査 自記式調査法	多職種協働に向けた保育士の専門性:チームの一員としての認識
26	帆足英一	2009	医療保育士養成の現状	小児看護第32巻 第8号 p1030～1035	病棟、外来や病児保育に勤務する保育士の技術を中心にいかに医療保育士の専門性を向上させよ豊かなチーム医療を展開すべきかという課題について明らかにする	行政文書の分析、医療保育テキスト、カリキュラムの検討	行政文書の分析、医療保育テキスト、カリキュラムの検討	医療保育士の役割と専門性:必要性
27	大宮里葉子・長栄香奈・植田美穂・三隅春奈・片岡早織・西田 悠・後藤淑子	2017	医療保育士が食生活サポートチームに参画する意義—ネフローゼ症候群の症例を通じて—	医療と保育 Vol.15 No.1p8～p16	長期入院患児の症例を通して食生活サポートチームでの連携をもとに遊びや食事への関わり、チームにおける保育士の役割を検討したので報告する	食生活サポートチームの対象となった1例の食生活の活動記録	活動記録の振り返り	病棟保育士の多職種との協働の具体性
28	石井 悠	2018	病棟保育士の役割の検討:小児一般病棟に勤務する保育士を対象として	医療と保育 Vol.16 No.1p40～p54	病棟保育士の保育への目指すこと及び達成感や目標達成のための実践について聞くことで、役割の一端を明らかにする	保育士としての働きを求められている保育士16名	半構造的面接法 語りに対してオープンコーディング・焦点化コーディングを行う継続的比較法を用いながら分析の観点を中質している	医療保育士の役割と専門性:必要性
29	橋本勇人	2009	医療福祉学から医療保育への示唆—ライフコース・医療と福祉の統合・ソーシャルワークとケアワークの関係—	川崎医療短期大学紀要29号 p37～41	医療福祉学の立場から医療保育を考えるにあたり到達点の一端を明らかにする	生態学的なライフコース論の中で医療保育が担当する領域を考察する医療と福祉の統合という視点から分析する	生態学的なライフコース論の中で医療保育が担当する領域を考察する医療と福祉の統合という視点から分析する	医療保育士の役割と専門性:必要性

において、病院によって医療保育の定義や捉え方、医療保育士の立場が違っており、その中で実習内容の構築の必要性、医療保育の役割と専門性について明確にする研究を進めるべきであるという考えもある¹⁶⁾。その教育課程の内容について、基礎教育は保育士試験科目に示される10科目を基本として構成され、乳幼児発達や小児疾患とその予防に関するものが多く、小児疾患に関連した授業内容はほとんどの養成校が提供している。しかし、医療保育に関連した科目を提供している養成校は少ない。

多くの学生は現行の授業内容で医療保育を実践することが難しいと感じており、また、健常児の保育について学習した学生は病児に対して保育士としてどのような関わりができるのか想像できない¹⁷⁾という報告もある。また、学生は医療保育を知ることによって医療の場を職場にする希望が高まり、必要な知識については病気の子どもについて知ることが重要¹⁸⁾と明らかにされている。医療保育士の技術教育は80%の講義項目は日常生活の支援が多く、そのうち、60%は看護と連携する技術として日常生活の支援、次に治療と検査に対する支援、情報共有と活用、遊びの支援と報告されている¹⁹⁾。しかし、医療保育士養成校であっても医療の場での実践実習は行われていないのが現状¹⁶⁾である。

そこで、医療保育士の専門性が発揮できるよう、卒後研修に含まれる基礎的知識や技術を保育士の基礎教育に導入し、医療保育士教育を視野に入れたカリキュラムが保育士教育に望まれる⁵⁾と指摘されている。医療保育教育でのカリキュラムへの課題は、多職種との協働に向けて、保育士教育を基盤に医療にかかわる専門職種としての役割の明確化、そのための教育の在り方を検討し推進すべきであるとされている。小児病棟で働く保育士の活動で役立っている保育士としての教育や経験のうち、病棟保育で役立っているものは、「発達心理学」「保育実習」「小児保健」など保育士教育科目、保育士の専門性を求められやすい遊びの技術に関する科目、対象となる子どもや親との相互関係の中での学ぶ実習、保育士としての実践経験、子育て経験など²⁰⁾が挙げられている。今後、保育士の基礎教育を土台にした医療保育士を視野に入れたカリキュラムが必要になると考える。

3. 看護師と保育士の協働に関するもの

看護師との協働を困難にしていることとして、

保育士が医療施設の中で子どもに関わる必要性は多くの看護師に認識されているが、施設の経済的理由や入院する子どもの状況等から保育士の配置やはたらきが制限される⁶⁾ことが挙げられる。また、看護師は保育士に期待しつつ協働を望んでいるものの、経営や体制、保育上の専門性が見えにくいという理由から保育士との協働の在り方に課題を残している。協働のための問題点として、看護師が保育士の専門性を認められないことや保育士の目標が見えにくいなどが考えられる。

医療の場で保育士が専門性を発揮できない理由として、保育士の専門性を理解してもらえていないこと、看護師から情報は伝えられているが、特定の情報(子どもの安静度、治療や病気の見通しから考えられる支援の必要性)が不足していると報告⁷⁾されている。これは、看護師と保育士のコミュニケーションの不足や保育士は、カンファレンスへの参加ができない等の状況が要因となっている。また、看護師は医療保育士の役割について、役割補完だけでなく看護師の手の回らないところへのフォローという看護補助というとらえ方をしており、医療保育士も看護師は医療保育士の活動内容を理解しておらず、自分たちの仕事を優先していると感じている現状がある²¹⁾。そのため、医療保育士の専門性について、看護師の医療保育士の役割の認識が影響し、対等になれない現状へとつながることが考えられる。

しかし、協働することによって、看護師と保育士が、お互いに自分にはない視点を相手が持っており、勉強になると感じている²²⁾ことも報告されている。子どもや親の支援における困難さに保育士とともに取り組んでいる医療の場もある。よって、病棟で保育士が保育の専門性を発揮できれば、子どもや家族の反応から看護師はそれを的確にとらえることができるのである。また、看護師と保育士のインフォーマルなコミュニケーションや協力し合う姿勢が看護師と保育士の良好な関係性を育むことが明らかにされている。コミュニケーションによる相互理解が課題となることが示唆されている。

4. 多職種との協働に関するもの

保育士が、保育士自身の裁量で保育活動を行い、保育の活動内容について多職種に相談し、多職種から情報を得て、また、保育士からも情報を提供するという協働のあり方は、保育士の専門性の一つである²³⁾といわれている。

協働への欠かせない要素として保育士に求められるものは、お互いを知ろうとする態度やつながろうとする意識、情報を整理して見極めることや保育士が得た情報を的確に判断して、情報を発信する行動力および情報を伝達する力である²⁴⁾といえる。また、保育士の視点や意図を伝えることが必要であり、保育士は、多職種の専門性や視点の理解が必要である。結果・目的・ゴールは同じでも、職種によってはアプローチの仕方や方法、優先順位が異なることを互いに理解・認識することが上げられ、多職種の支援の期待をすることも必要であるといわれている。そして、状況に応じた役割取得では、状況を把握する力や、臨機応変・柔軟に調整して対応することや働きかける力、周囲を巻き込む力が必要であることが明らかになっている。

病棟保育士が考えるチーム医療の一員としての認識についての調査結果によると、医療保育士が治療や病状に合わせた保育等を考え実践していくことが求められていること、医療チームとしての認識が確立しつつあるとされている。また、多職種に保育の観点からの専門的知見を積極的かつ分かりやすく伝え、他の医療職との積極的な連携・コミュニケーションを意識していくことの重要性が報告されている²⁵⁾。保育の専門的視点からの意見を発信し、他の医療職からの理解を得ることが重要であると同時に保育の専門的知識と医療の知識などの習得や自己研鑽する必要性が明らかにされている。そして、医療保育専門士の資格の有無がチームの一員としての認識の有無と関連していることから自己研鑽が必要であると結論づけている。

V. 考察

1. 小児医療における医療保育士の役割と専門性

2018年に改定された「新保育所保育指針」では保育士に求められる主要な知識及び技術として、発達を援助する知識及び技術、活援助の知識及び技術、保育の環境を構成していく知識及び技術、遊びを豊かに展開していくための知識及び技術、子どもの関係構築の知識及び技術、保護者等への相談、助言に関する知識及び技術である²⁶⁾。そして、医療の場でこれらの知識と技術をもとに保育を実践するために、子どもの疾病に対する基礎的医学知識が不可欠であることが明らかになった。

小児医療における医療保育士の役割と専門性は、

病気の子どもの発達を促し、成長への支援をするだけにとどまらず、療養生活環境を保育の環境として構成し、遊びを通して子どもがその子らしく療養生活を主体的に過ごすことができるよう支援することである。また、日々変化する子どもの病状を多職種と協議し、子どもの変化に対応した保育を実践することであるといえる。個別対応の保育実践を医療という日常とは違う場で発揮するためには、医療現場での保育活動を確立し、役割と専門性を顕在化する必要がある。

2. 医療保育士のカリキュラム

医療保育士を視野に入れた保育士養成課程における教育において、医療の場や入院環境を含めた医療保育関連科目を保育士養成の科目として配置することは、病児の保育に関する知識や技術を高め、子どもの個別に対応できる医療保育の力となる。実際に、疾患を持つ子どもが、非日常の生活の環境に早期に適応できるための支援は、保育士の保育の環境を構成していく知識及び技術が必要である。さらに、保育士による豊かな遊びの展開が、子どもの不安を緩和し、安心して入院生活を送る支援となることが考えられ、小児医療の中で、いかに、保育士の専門的知識と技術を発揮できるかが重要となる。そして、保育士が養成課程の中でどのような教育を受けてきたのかは保育士として働くうえで重要な視点となる。

そこで、医療保育士の教育課程において、臨床の場での実習を体験させ、実践力を養うことが必要となる。そして、病気を持つ子どもの保育をイメージさせることで、学生の職業選択の幅を広げることができるといえる。また、多職種の理解をはかり、保育の専門性を発揮するためにも、医療現場での保育活動を可視化できる力や専門性を発信する力を育てる必要がある。

3. 看護師と保育士の協働

看護師との協働において、医療保育士の役割を看護師が実感することで、医療保育士をチームの一員として対等な立場で協力体制を整えられると結論づけていた。看護師に対して、医療保育士の専門性が明らかにされる必要がある。そして、保育士が医療で保育を実践する際には、看護師の専門性を知る必要がある。これは、看護と保育が共に生活を支援するという共通性があることや、その支援方法に類似

性があるが、子どもを捉える視点には、お互いの専門性の違いがあるため、お互いに理解することが必要となるのである。相互理解をはかるためには、子どもを中心とした情報の共有、子どもへの支援計画への意見や助言を出し合う討議の場が必要となる。しかし、その場が持たれていない状況もあるため、積極的にコミュニケーションを双方から持つ必要がある。このことで、保育士の専門性が明らかになれば、看護師の保育への期待は大きいものがあると考えられる。

看護師が医療保育士の役割に興味を持ち、積極的に理解したうえで、医療保育士よりもたらされた情報を看護計画に反映させることができれば、疾患を持つ子どもへの援助がより子どもにとって最善のものとなると考える。そして、医療保育士は自分の言葉で役割を伝えていくことが重要となり、医療保育士の専門性について、保育の立場から発進する必要性が考えられた。

4. 医療保育士と多職種との協働

保育の活動内容について多職種に相談し、多職種から情報を得て、保育士からも情報提供をしているという相互の連携を行うことによって協働はなりたつ。医療と保育の専門性や視点を理解しつつ、他の医療職との積極的な連携・コミュニケーションを意識していくことが重要である。保育士に求められるものは、お互いを知らうとする態度や、つながろうとする意識、情報を整理して見極めることや保育士が得た情報を的確に判断して、情報を発信する行動力および情報を伝達する力ということが明らかになっている²³⁾。

そのためには、より、専門的な子どもへの保育計画を実践し、経験を積み上げ経験知を増やすことが重要と考える。医療保育士としての自己研鑽による質の向上によって、多職種からの理解が得られると考えられる。しかし、医療チームの要請で、医療保育士が対象とする年齢は広がり、治療や病状に合わせた保育の実践等が求められている現状があることから、多職種間において保育士の専門性をどのように伝えるかが課題となると考えられる。

VI. 結論

1. 小児医療における医療保育士の役割と専門性

医療保育士の役割と専門性は医療の基礎的知識

を持ち、病気の子どもの発達を促し、成長への支援をするだけにとどまらず、療養生活環境を保育の環境として構成し、遊びを通して子どもがその子らしく療養生活を主体的に過ごすことができるよう支援することである。

2. 医療保育士のカリキュラム

医療保育士を視野に入れた保育士養成課程における教育では、医療の場や入院環境を含めた医療保育関連科目を保育士養成の科目として配置し、病児の保育に関する知識や技術を高める必要がある。

3. 看護師と保育士の協働

看護と保育が共に生活を支援するという共通性があることや、その支援方法に類似性があるが、子どもを捉える視点には、お互いの専門性の違いがある。互理解をはかるためには、子どもを中心とした情報の共有、子どもへの支援計画への意見や助言を出し合う討議の場で、積極的にコミュニケーションを双方から持つ必要がある。

4. 医療保育士と多職種との協働

保育の活動内容について多職種に相談し、多職種から情報を得て、保育士からも情報提供するという相互の連携を行うことによって協働はなりたつ。医療と保育の専門性や視点を理解しつつ、他の医療職との積極的な連携・コミュニケーションを意識していくことが重要である。

今後の課題

医療保育士が、小児医療に果たす役割は大きい。しかし、多くの学生は現行の授業内容で医療保育を実践することが難しいと感じている報告があり、小児医療の場における保育の充実や適切な人員を配置することが困難な状況になると考えられる。また、相互理解するべき小児医療の多職者に向けての課題として、医療保育士の役割と専門性についての考え、多職種者への発信と相互のコミュニケーション方法と内容などが明確となった。そこで、医療保育士へのインタビューを行い、役割と専門性についての考えや多職種者とのコミュニケーション方法と内容、工夫及び医療保育士養成課程への要望について明らかにすることが今後の課題となった。

引用・参考文献

- 1) 吉田幸恵：保育士養成の研究 ―医療保育専門士の展開から―，名古屋経営短期大学子ども学研究論集，2010，No. 2，(2)，11-23.
- 2) 金城やす子：小児病棟における保育士の業務実態と期待されること ―全国の小児病棟看護師長の調査から― 医療と保育，2012，Vol.10，No. 1，2-11.
- 3) 原田真澄：入院患児にとって医療保育が持つ意味，中国学園紀要，2008，(7)，69-75.
- 4) 山田千明・林江恵子・高橋君江 他：病棟保育における保育士職の専門性，共栄学園短期大学研究紀要，2009，第25号，137-150.
- 5) 佐々木澄子・森美智子：看護との連携からみた保育士養成施設における医療技術教育，日本ヒューマンヘルスケア学会誌，2017，2，(1)，81-91.
- 6) 飯村直子・江本リナ・河口千鶴 他：医療施設における看護師と保育士の連携の実態 ―健やか21推進事業小児の入院環境向上のための活動〔保育関連職種との連携プロジェクト〕―，日本小児看護学会誌，2008，Vol. 17，No. 2，66-72.
- 7) 深谷基裕・伊藤孝子・江本リナ 他：子どもが入院する病棟の保育士と看護師との協働 ―保育士が専門性を発揮できないと感じる背景―，日本小児看護学会誌，2008，Vol. 17，No. 2，24-31.
- 8) 秋山真理恵・江本リナ・松尾美智子 他：子どもが入院する病棟の保育士に関する文献検討 ―保育士の役割と現状―，日本小児看護学会誌，2008，Vol. 17，No. 1，79-85.
- 9) 鈴木美佐・流郷千幸・村井博子 他：小児病棟における保育士の雇用に関する実態 ―公立総合病院の看護部長による回答から―：聖泉看護学研究，2017，VOL.6，53-66.
- 10) 松田信樹・濱田真由美・鎮朋子 他：医療保育士の業務に関する調査 ―課題と将来展望―，兵庫大学論集2016，第21号，199-205.
- 11) 能澤ひかる：病棟保育士・子ども療養支援士から見た病棟の子どもたちの心理的变化，お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要，2014，Vol. 16，25-34
- 12) 京極 恵・千田晶子：小児病棟での保育士の役割と活動の実際について，近畿大学臨床心理センター紀要，2010，Vol. 3，177-189.
- 13) 上出香波・斎藤政子：小児病棟における保育士の専門性に関する検討 ―医療保育専門士への面接調査を通して―，保育学研究，2014，第52巻，第1号，105-115.
- 14) 鈴木裕子・北村亮俊、及川郁子 他：医療保育士の専門性と養成上の課題，東京家政大学研究紀要，2004，第44集，(1)，111-116.
- 15) 原田真澄：医療保育専門誌の資格制定に伴う養成校の課題，中国学園紀要，2007，(6)，97-103.
- 16) 宮津澄江・笹川拓也・入江慶太 他：医療保育養成の取り組みに関する現状と課題，川崎医療短期大学紀要，2009，29号，59-64.
- 17) 新垣彬子・入江慶太・笹川拓也 他：本学医療保育科病児保育コース学生の学びに関する研究Ⅰ：「医療」に対するイメージの変化から見る実習および学内指導の効果の検討，川崎医療短期大学紀要，2009，29号，71-77.
- 18) 金城やす子・碓氷ゆかり・安心院朗子他：保育士養成校に在籍する学生の医療保育に関する認識，障害理解研究，2011，(13)，35-43.
- 19) 金城やす子，松平千佳：小児看護における医療保育士の存在と今後の課題 ―イギリスのHPSの実情と教育過程から我が国の医療保育士の教育の在り方を検討する―，平成16年度特別研究報告書，2005.
- 20) 中村伸江・宮本茂樹・松浦信夫：小児病棟で働く保育士の活動実態と病棟保育で役立っている保育士としての教育や経験，小児保健研究，2013，第72巻，第4号，558-563.
- 21) 山北奈央子・浅野みどり：看護師と医療保育士の子どもの尊重した協働における認識，日本小児看護学会誌，2012，Vol.21，No.1，1-8.
- 22) 穂高幸枝：看護師がとらえた病棟保育士の専門性とそれをとらえるきっかけとなった体験，日本小児看護学会誌，2013，Vol. 22，No. 2，89-96.
- 23) 土屋昭子・吾田富士子・碓氷ゆかり 他：医療保育専門士の業務実態 ―活動フィールドによって異なる専門性の解析のために―，医療と保育2019，Vol. 17，No. 1，6-15.
- 24) 小野鈴奈・谷川弘治・濱中喜代：小児医療現場で多職種連携・協働していくために保育士に求められること，医療と保育，2019，Vol. 17，No. 1，28-40.
- 25) 上出香波・林典子：病棟保育士が考えるチーム

- 医療の一員としての認識について, 医療と保育, 2019, Vol. 17, No. 1, 42-51.
- 26) 「新保育所保育指針」2018年改訂
- 27) 帆足英一: 医療保育士養成の現状, 小児看護, 2009, 第32巻, 第8号, 1030-1035.
- 28) 大宮里菜子・長栄香奈・植田美穂他: 医療保育士が食生活サポートチームに参画する意義 ―ネフローゼ症候群の症例を通じて―, 医療と保育, 2017, Vol. 15, No. 1, 8-16.
- 29) 石井 悠: 病棟保育士の役割の検討: 小児一般病棟に勤務する保育士を対象として ―医療と保育, 2018, Vol. 16, No. 1, 40-54.
- 30) 橋本勇人: 医療福祉学から医療保育への示唆 ―ライフコース・医療と福祉の統合・ソーシャルワークとケアワークの関係―, 川崎医療短期大学紀要, 2009, 29号, 37-41.